
憑依されし、信長

麗蘭

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

憑依されし、信長

【コード】

N4081C

【作者名】

麗蘭

【あらすじ】

「信長様の御様子がおかしい」。城内でそんな声がしばしば聞こえてきた。不審に思った森蘭丸は

憑依されし、信長

(前書き)

この作品は、一部今川家支持者の方々には、少々不快な点が御座います。尚、作品を読んでからの苦情は、一切お聞き致しません。ご了承下さい。

憑依されし、信長

彼は、生まれながらに、不思議な力を持ち合わせていた。

時は織豊の時代に差し掛かりし頃。

信長本拠地である尾張に、ある異変が起こった。
それは

「ねえ、なんか最近、信長様の御様子、おかしくない？」

「やつぱり！？わたしもそう思ってたのよ！！」

「前まではあんなに怒鳴らなかつたじゃない？それが今じゃ小さな
ことだがみごと……」

侍女は額に手を置き、気だるそうにため息をついた。

もう一人も片方に同じく、真剣な面持ちで考えこんでいる。

「そうそう。まるで誰かと入れ替わったかのように……」

侍女達の話を通し目で聞きながら、彼は通りを歩いていた。

確かに、信長様の御様子がいつもと違うのは本当だが……。

「蘭丸殿……！！」

「はい？」

後ろから呼び止められ、蘭丸は踵を返した。

森 蘭丸 。そう、彼は、織田の大将・信長公の愛姓、十七に
して森家当主の、織田家きつての小姓であった。

「蘭丸殿……」

「どうなされた？」

蘭丸は自分を呼び止め走って来た臣下の者に、温厚な面持ちで尋ねた。

すると家臣の者は、一見神妙な表情で、顔が真っ青のまま語り出した。

「さ、先程…、信長様の御部屋に、頼まれていた御食事を御届けに参ったところ……」

「どうされた？」

家臣は青い顔をいつそう青くした。

「…その際、信長様の御部屋から……」

彼の話によると、彼が信長に食事を届けに部屋の前に行くと、声を掛ける前に、信長の声が聞こえたそうだ。

彼が入ってもよいのかと迷っていると、自然と中の声が漏れてきた。

「どうしたものか……」

後々考えると、それは信長の声ではなく、全く別人の男声であった。

「信長に憑依したはいいが……。しかし、この生活にも段々と飽きていたのう……」

彼は危うく食事を取り落としそうになった。

(憑依…？ いったい、何の話だ)

部屋の中の男は、物音一つさせず、未だ一人でぶつぶつと何か小言を言っている。

「まあ、信長の体を手に入れただけでも、いいでしょう。暫くはこの生活を続けるとしようかのう」

彼は、急いでその場を逃げ去った。

憑依されし、信長

「と、いうわけで御座いまして……」
「ほおう」

蘭丸は腕を組み、ゆっくりと顎に手を当てる。
すると、慌てて家臣は腕を振り、必死に蘭丸に願い入れをする。

「本当です!!!信じてください!」

蘭丸は温厚な表情を変えずに言った。

「…まあ、普通なら信じられないでしょうが、」

「ですけど、ほんと……」

より慌てる家臣の言葉を遮り、蘭丸は静かに続けた。

「最近の信長様は、以前より少し御様子が違う。それを否定出来なくもない」

家臣の表情が一気に明るくなる。

「じゃあ……」

蘭丸は浅く微笑んだ。

「ああ、そなたの言い分、信用致そう」

家臣の顔に、安堵の色が広がった。

「それにしても……、いったいどういう……。」

蘭丸は、薄暗い月夜の中、小さな蠟燭ろうそく一つを灯し、一人部屋に籠っていた。

しかし最近、信長のもとで仕える事が少なくなったような……

ふと蘭丸は視線を上げる。

「今一度、信長様に近づいてみるか……」

「信長様、お出掛けですか」

宵のうちに城を裏でから抜け出そうとしていた信長は、背後から

気配も無く出現した蘭丸を見て、少し驚いたような面持ちを持った。「ああ。久しく城下にも出ようかとしたのだが、宵にも出らんと、城の者がまた煩い」

「左様で御座いましたか。この森蘭丸、御供させて頂いても宜しいでしょうか」

再び信長の顔に吃驚ウチウチな表情が広がる。

「どうなさいました？」

蘭丸の問に、信長は心底不思議そうに言った。

「止めぬのか？」

それに蘭丸は、彼らしい答えを出した。

「止めて、彼方は聞き入れますか？どうせ聞き入れぬのなら、供をして警護した方が正しいのでは」

その答えに、信長は大きく嘲笑する。

「蘭丸といつたか」

蘭丸の顔に、僅かな歪みが、一瞬だけ生じた。

「はい。もうお忘れですか」

「お主、なかなか面白いのう。よし、気に入った。連れて来い。同行を許可する」

「恐れ入ります」

二人は城の裏口から、そっと漆黒の闇へと消えていった。

朝陽が流れ込むより先に、信長を引き連れ城に戻っていた蘭丸は、布団の中で一人考え浸っていた。

（あの時信長様は、確かにわたしの名を御存知では無かった。以前の信長様なら、わたしを知らぬ事もなく、まして宵に城を抜け出すなど……）

ならば、あれは誰だ？

こうなれば、あの家臣の申す事も満更ではなくなってきた。

「蘭丸殿」

部屋の障子に、男の影が映る。

蘭丸は上体を布団から起こし、僅かに纏れた闇色の長髪を、手早に結った。

「信長様がお呼びです。只今、広間でお待ちかねで御座います」

男は伝言だけを伝えると、蘭丸の是非も聞かず、足早にその場を去った。

しかし、蘭丸の答えはもう決まっている。

蘭丸は起き上がると、素早く布団を片付けた。

きちんとした正装に身を包み、足早に信長の待つ広間を目指して歩みを進めた。

「おお蘭丸、よう来たな」

「はっ……」。して、お呼びでしょうか」

蘭丸は畳みに膝を折って頭を垂れ、恭しく正座する。

すると、信長の表情はより和らぎ、言った。

「よいよい。面を上げよ」

蘭丸はゆっくりと頭を上げる。

頭を上げたその先には、さぞ機嫌の良さそうな、織田信長。

蘭丸は、ほんの僅かに眉根を寄せる。しかし信長はそんな事には気付かない。

「御主、儂が何者かわかるか？」

「……………」

何を言い出すかと思えば……………。

まさか、彼方から仕掛けてくるとは。

しかし、頭の利く蘭丸が、何の策もなしにこのこと謀にはまる筈がない。

蘭丸はわざと驚いたように言った。

「何を申されます。我等が御館、織田信長様では御座いせんか」
それに信長は大口を叩いて笑う。「はっはっはっ！！いやー、
そうかそうか。……しかしな、蘭丸」

「はい」

信長が真顔に戻る。

「僕は、今までに多数の人の血が流れるのを見てきた。勿論、この
手で流した血もある」

「……………」

蘭丸は黙ってそれを聞いている。

「だがな、僕は考えた。そうやって殺された者達が信長という体
に入れば、どうなるかとな」

信長の表情が徐々に厳しいものになる。

「例えば、もしここにいる信長が信長ではなかったら？」

信長がすつと立ち上がり、此方に向かって来る。

しかし、蘭丸は皺一つ動かさず、正座して真っ直ぐに信長を見詰
めている。

「もし、わたしが天下目前にして桶狭間で破れた、今川義元であつ
たら？」

蘭丸はぴくり、と指を動かす。

「もし、わたしが今、御主にとり憑こうとしているならば？」

信長 いや、義元は、にやりと笑みを見せると、蘭丸の前に立
ち止まり、懐刀を振り上げた。

蘭丸は鋭利な瞳を向け

「蘭丸殿！！！」

「はい？」

先日の家臣が蘭丸に再び声をかけた。

「いや、最近では信長様の御様子が見えなくて、安心致しました」

「確かに……。一件落着、ですね……」
蘭丸は小さく微笑んだ。

森 蘭丸、彼は幼少の頃より、霊を浄化させる力を持ち合わせていた。

勿論、彼にとっては、たった一体の幽体を除霊することなど、造作もなかった。

それが幸を呼び、今回の事は幕を閉じた。

あの時、蘭丸の詠唱に倒れた義元は、この世に戻った信長の魂と行き違いに、この世から出ていった。

その後、目を覚ました信長は、それまでの事を全く覚えてはおらず、何とも不思議な面持ちで考え込んでいた。

また、義元が信長の体に憑いたのは、どうやら自分の最期の怨みを、信長の体に乗つとる事で晴らそうとしたからだろう。

それに、蘭丸に乗り換えそうとしたのも、単なる義元の感心からだったのかもしれない。

「蘭丸よ」

信長が渡りを歩いていた蘭丸に声をかける。

「信長様。如何なさいましたか」

「うむ。近頃、主と茶の時間を共にしておらんかったと思うてな。どれ、濃や猿とでも、一服せんか」

いつも通りの信長が、蘭丸には懐かしく思えた。

「はい。信長様」

憑依されし、信長

わたしの御館様は

信長様ただお一人です。

(後書き)

如何でしたでしょうか？楽しんで頂けたならば、幸いです。感想などありましたら、どうぞお気軽にお書き込み下さい。

憑依されし、信長

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4081c/>

憑依されし、信長

2009年3月24日10時18分発行